

## 西光寺庫裏について

所在 明石市大久保町西脇

### 由来

西光寺は、鶏谷山安養院西光寺といい、開基は奈良時代の恵弁上人という。寺伝にはかつて北の丘陵に報恩寺という七堂伽藍の寺があり、その塔頭の一つであった。

天正7年の羽柴秀吉の三木攻めの際、別所方についたため、焼き討ちにあい、灰燼に帰した。僧は難を逃れ吉田村に移った。

その後、文禄元年に了法上人が吉田から現在の地に再建した。

本堂は宝永6年に再建され、今年令和元年に解体修理を行った。

庫裏は、明治45年に旧大久保本陣の母屋を当時250円で買って、移築したものと伝わる。明治3年に本陣、脇本陣が廃止されて以降、本陣は村役場として使われていた。

### 経緯

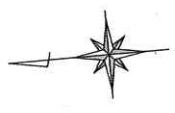
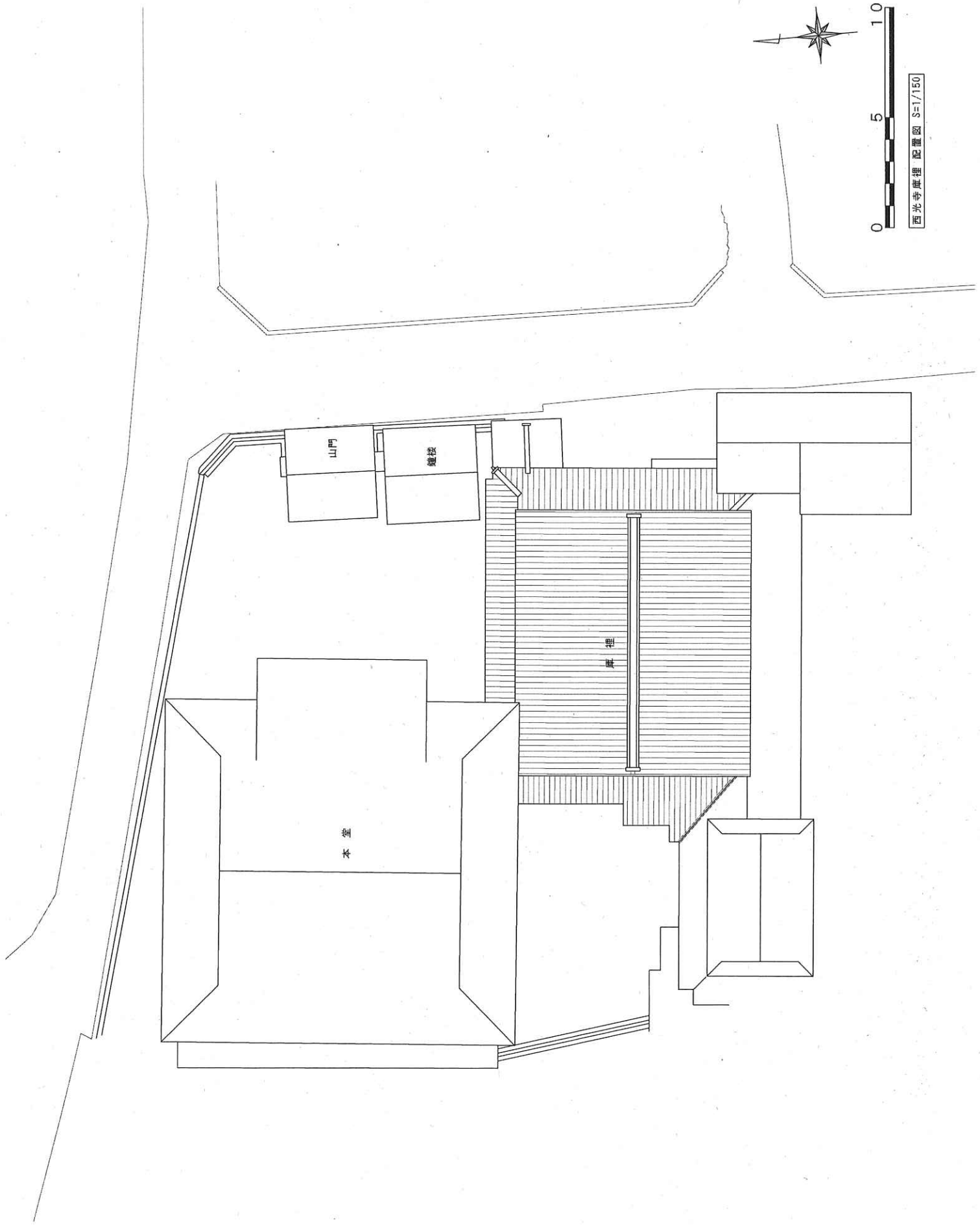
令和元年7月に西光寺檀家より、本堂の改修にあわせ、庫裏も改修したいが、現住職も由緒のある建物なので残せるものなら残したいとのことで、実際に文化財的な価値があるのかどうかを専門家の目を見てほしいとのことであった

### 調査所見

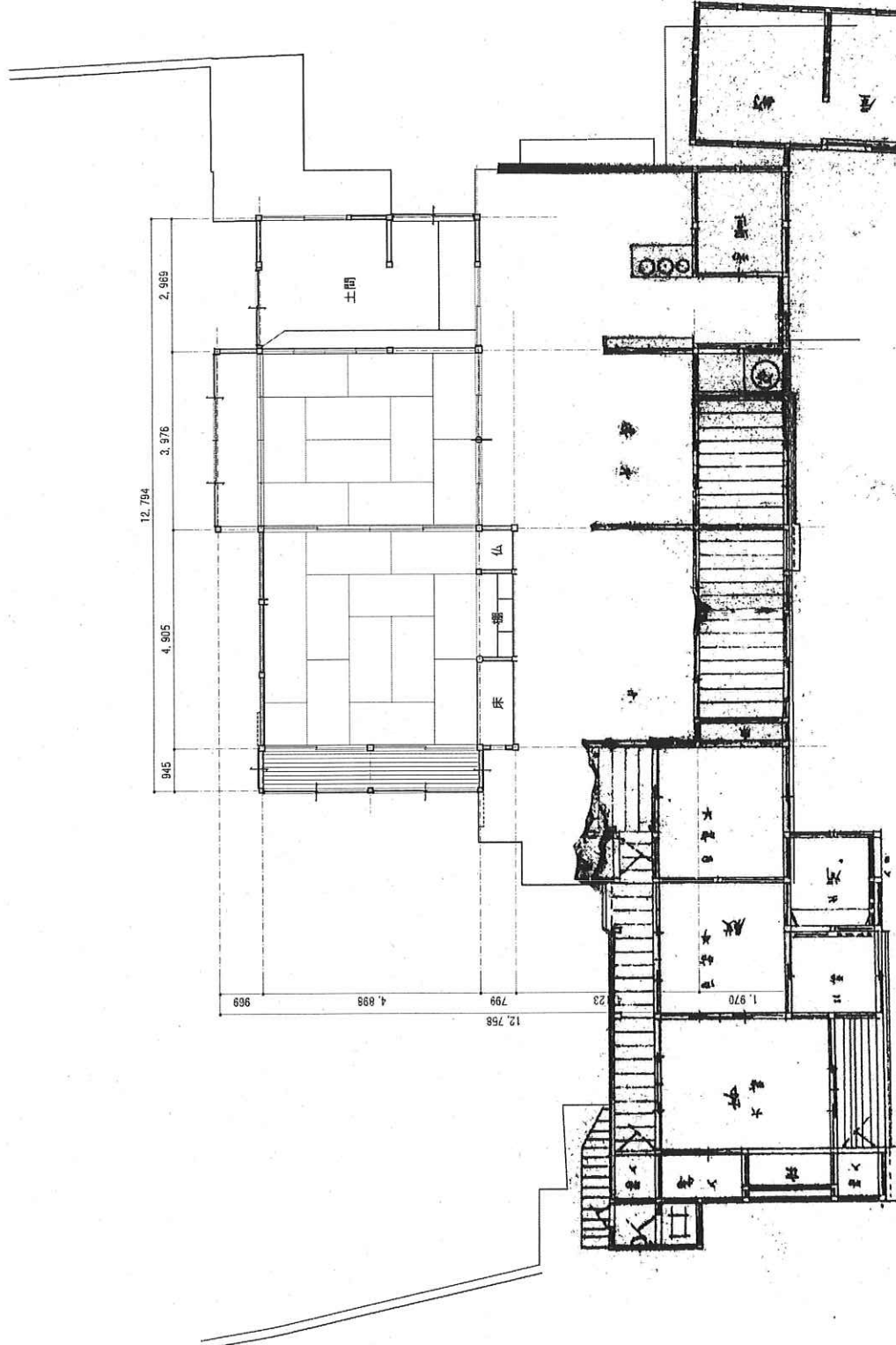
本陣の上段の間はほとんどそのまま残されていると判断できる。12畳あり、8～10畳の上段の間が通常であるが、それよりも大きく、欄間の格子も武家が好みそうな意匠である。

その他の部分は改変を受けており、上段の間も次の間と面を一にするため、柱を切り下げた痕跡もあり、また、補強材を設けるなどの改装がある。

明治時代に移してきたという伝承は裏付けられそうであり、文化財的価値はある。

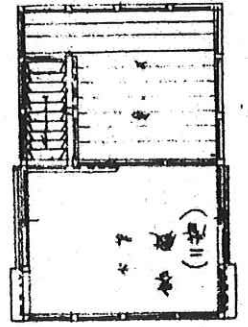
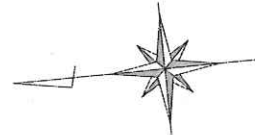


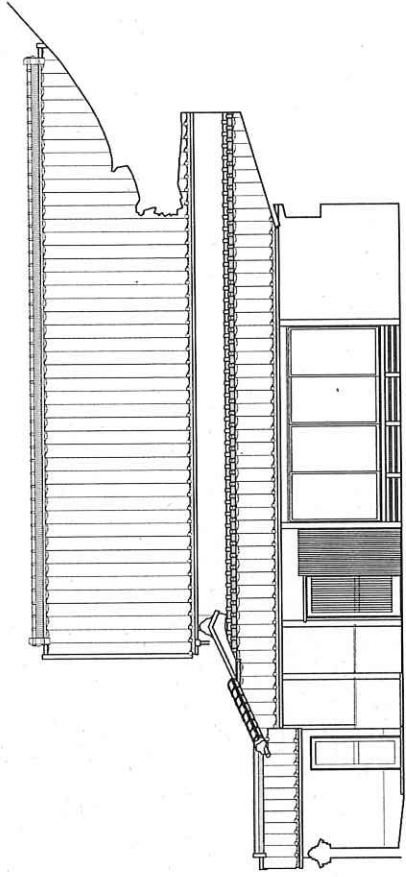
西光寺庭裡配置圖 S=1/150



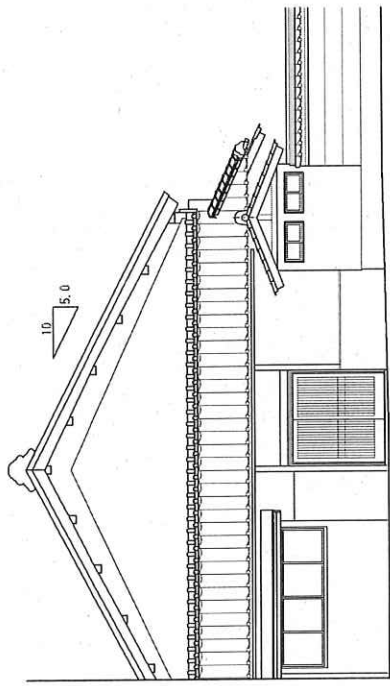
西光寺庫裡 平面図 S=1/100

西光寺	庫裡	第一	階	平面	図
西光寺	庫裡	第一	階	平面	図
西光寺	庫裡	第一	階	平面	図
西光寺	庫裡	第一	階	平面	図
西光寺	庫裡	第一	階	平面	図
西光寺	庫裡	第一	階	平面	図
西光寺	庫裡	第一	階	平面	図
西光寺	庫裡	第一	階	平面	図
西光寺	庫裡	第一	階	平面	図
西光寺	庫裡	第一	階	平面	図

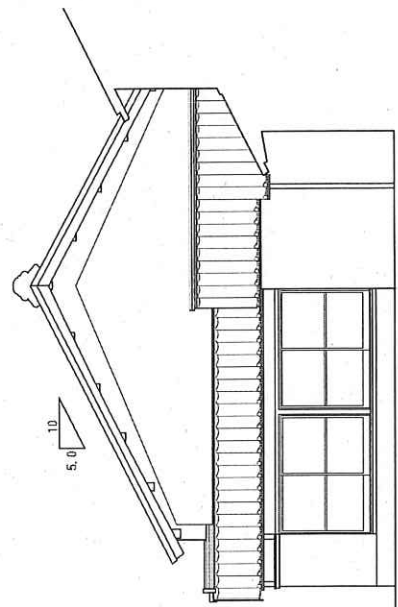




北立面图



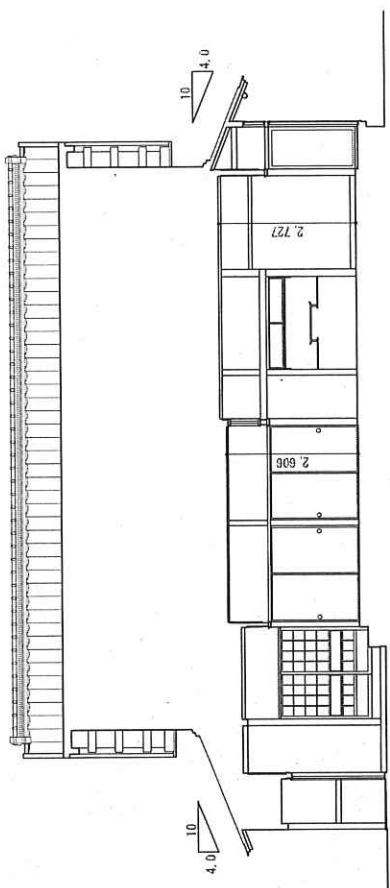
東立面图



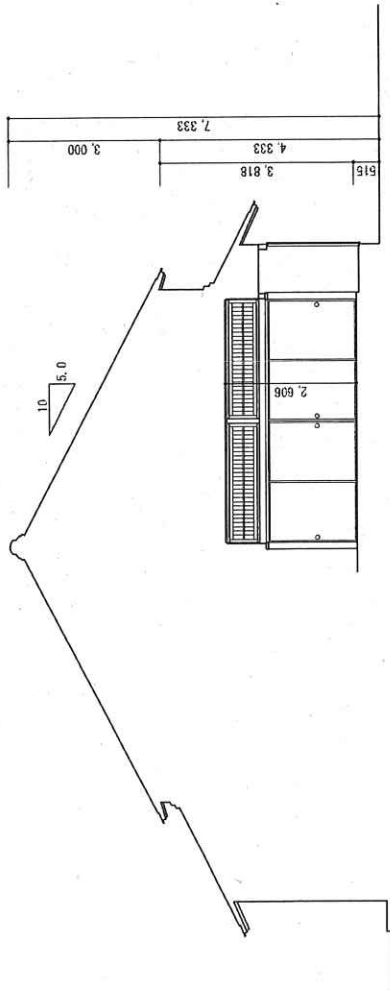
西立面图



西光寺佛龕 立面图 S=1/100



B—B 断面图



A—A 断面图



西光寺禅院 断面图 S=1/100



西光寺山門



西光寺庫裏



西光寺庫裏



西光寺庫裏



西光寺上段の間



西光寺欄間

## 御厨神社弁材船模型

長さ 208 cm 幅 65 cm 高さ 25 cm

天保6年(1835)6月に明石市東二見村の天神丸 平のや清蔵、天社丸 平のや清右衛門、天徳丸 かしは屋弥兵衛、西二見西之町の明德丸 嘉十郎が海上安全を祈って、御厨神社に奉納したものである。大工は大坂堺筋の長堀橋南詰にいたはりまや清兵衛である。長堀橋南詰は江戸時代後期に金毘羅参りをする客を乗せた船が発着していたところであり、当船模型は金毘羅参りをする客を大坂から丸亀まで送っていた二見の金毘羅船を模したものと考えられる。

奉納 御宝前 海上安全

天保六年乙未六月吉祥日

願主 東二見西之町

天神丸 平のや清蔵

天社丸 平のや清右衛門

天徳丸 かしは屋弥兵衛

西二見西之町

明德丸 嘉十郎

大坂堺筋長堀橋南詰鰻谷東口江入

大工 はりまや清兵衛作





御厨神社船模型



御厨神社船模型



御厨神社船模型



御厨神社船模型船底刻字



御厨神社船模型船底刻字

## 中崎公会堂について

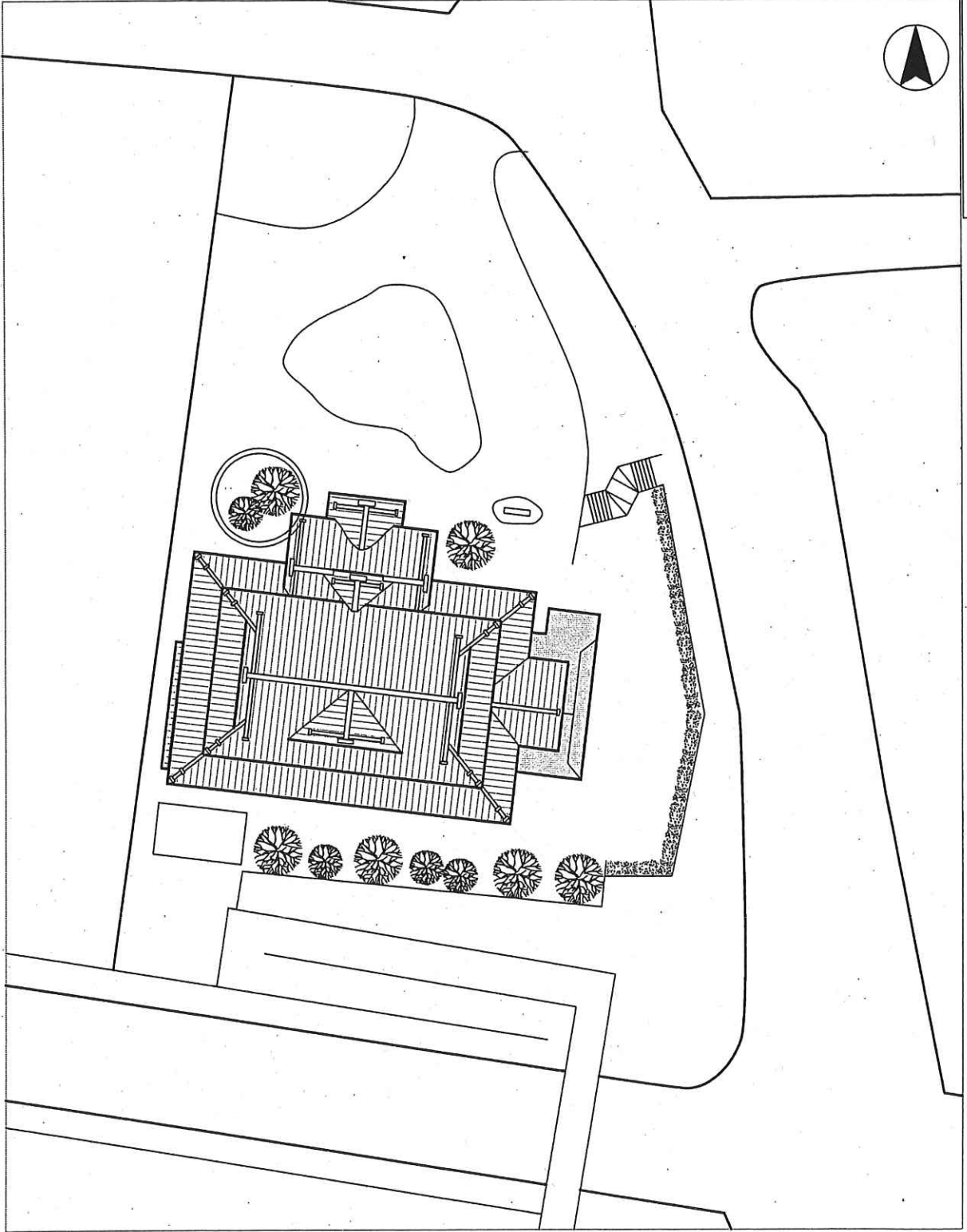
所在の場所 明石市相生町1丁目119番19

構造並びに大きさ 木造平屋建  
平入り唐破風玄関付  
入母屋棧瓦葺  
建築面積 499.33 m<sup>2</sup>

所有者 明石市

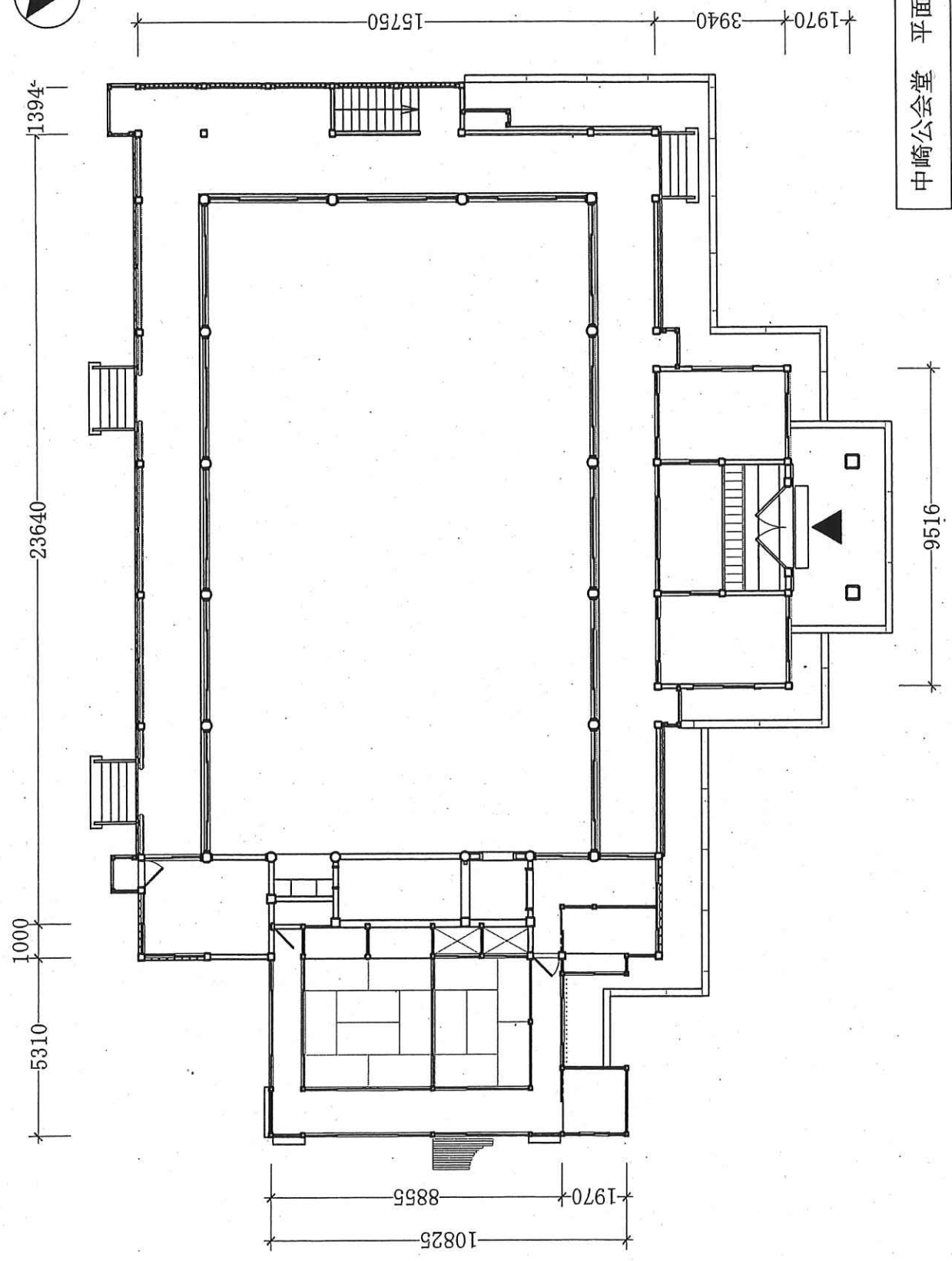
建設年代、大規模な改修年代 明治44年(1911年)4月竣工  
昭和58年(1983年)3月大規模改修

備考 平成12年(2000年)7月 明石市都市景観形成重要建築物指定  
平成23年(2011年)7月 国登録有形文化財登録



中崎公会堂 配置図

中崎公会堂 平面図



107 加東市明治館 (旧加東郡公会堂)

1次調査番号 190023

所在地 加東市社 777

旧公会堂 桁行 23.6 m、梁間 17.7 m、入母屋造、棧瓦葺、正面中央突出部付 桁行 9.8 m、梁間 4.0 m、切妻造、本瓦葺、正面中央1間唐破風付/大正元年 (『加東郡誌』)

加東市明治館は、加古川左岸の丘陵に位置する旧社町の市街地の西端部に建つ。当建物は明治44年に着工し、翌大正元年に竣工した旧加東郡公会堂である。

当建物の構造形式は、桁行8間、梁間6間、入母屋造棧瓦葺の南北棟の主体部に、幅1間の下屋を廻らせ、背面のみは2重に下屋を出して2間幅として入側縁の廊下とする。正面である東面には桁行5間、梁間2間、切妻造、本瓦葺の玄関が取り付く。玄関部には唐破風の車寄せが突出する。主体部正面には千鳥破風が付き、その下部に切妻造の玄関部が取り付く構成であり、千鳥破風の降棟の下端が切妻造の玄関の大棟に連続するという独特な屋根の形状になる。

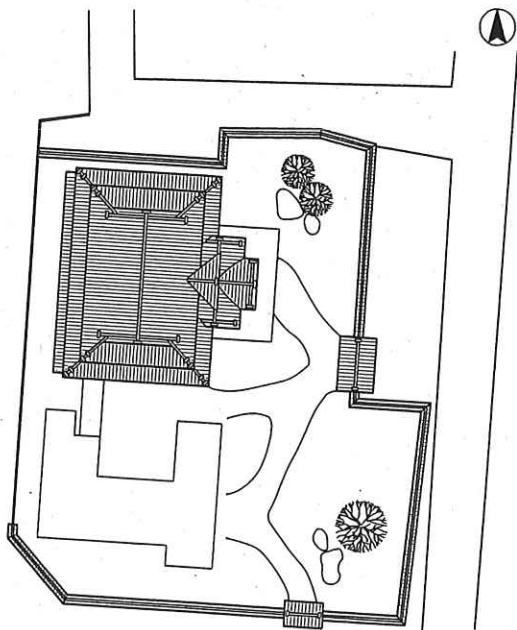
外観の意匠については、主体部は丸柱上に大斗肘木と寺院風であるのに対し、四周の下屋と玄関は角柱上に舟肘木が載る。正面の千鳥破風には下部の径に対して極端に上部を太くした特徴的な大瓶束を見せ、主体部の妻飾は冢扱首と板葦股を用い、横連子の通気口を開ける。玄関部の妻飾は冢扱首と板葦股

とし、車寄せは胴張りをもたせた角柱が支え、袖切りを持つ虹梁を架ける。木鼻の線形は大仏様の特徴をもつ。玄関部は腰を簾子下見板張りとし、ガラスの引き違い窓をはめる。このように、外部に現れる意匠は異なる時代の様式を自在に折衷しており、日本の伝統的な建築様式に対する設計者の習熟を感じさせる。

いっぽう主体部の内部は、キングポストトラスの小屋組によって無柱の大広間が実現している。大広間の天井は二重折上格天井でシャンデリアを下げる。西・南面と東面の一部の支輪板を透明の樹脂として明かり取りとしているが、これは近年の改造であろう。北面に床の間を設け、左右に書院と床脇を備える。書院は地袋を備え、大広間側に火灯窓、廊下側に丸窓をそれぞれ開く。床脇は違棚・天袋を備え、狝潜りが開く。床の間部分を除く四周に内法長押を廻し、さらに四周に蟻壁長押を廻すが、天井が高いために蟻壁の成が大きくなっている。入側通り、側柱通りとも柱を2間毎に配置し、入側と側の吊束どうしを2間毎に海老虹梁でつなぎ、廊下の空間を特徴づけている。

当建物の建設の経緯や設計者は伝わっていない。しかし、本建物の前年に竣工した中崎公会堂(旧明石郡公会堂、No.105)とは平面・意匠・構造において酷似している。両者の関連性は不明だが、中崎公会堂の設計者は奈良県技師として古社寺修理に携わった加護谷祐太郎であることがわかっており、なんらかの関連性があるとみられる。

加東市明治館の建物は、異なる時代の日本建築の様式を折衷させる技巧とともに、西洋建築の構造技術の導入によって初めて可能になる大空間を特徴とし、まさに近代和風建築の典型といえよう。また、明治末期から大正期にかけての地方における公会堂というビルディングタイプの展開を知る上でも、貴重である。(松下)



▲配置図 (1/800)



中崎公会堂全景



中崎公会堂正面



中崎公会堂内部